

第2回電池技術研究部門フォーラム

「全固体型蓄電デバイス実用化への挑戦」

—高信頼性・安全性を実現するリチウムイオン蓄電池の最新開発状況—

コンパクトに電気エネルギーを貯蔵できるリチウムイオン蓄電池は、スマートフォン等身近なポータブル情報機器に欠くことのできないものであり、電気自動車や再生可能エネルギーの貯蔵など大型のシステムにも使用が広がっています。用途の拡大に伴って、さらなるエネルギー密度の向上が求められる一方で、安全性の確立と信頼性の向上も強く求められています。

これらの要請への解決法として、有機電解液の代わりにリチウムイオンを輸送する固体電解質を用いた全固体型リチウムイオン蓄電池が長年研究されてきましたが、固体電解質のリチウムイオン伝導度の低さや固体電解質と電極活物質との良好な界面が形成できないなどの問題で実用化には至っていませんでした。しかし、最近、イオン伝導率の高い新しい固体電解質の開発や全固体電池化の手法の進歩によって、全固体型リチウムイオン蓄電池の実用化が視野に入ってきています。今回は、固体電解質と全固体電池の研究を活発に進められている東京工業大学 菅野了次先生に基調講演をいただくとともに、電池技術研究部門における固体電解質およびそれを応用した全固体型リチウムイオン蓄電池の研究、そして、固体電解質が実現する新しいリチウム-空気電池に関する研究をご紹介します。本フォーラムは、私共の研究のご紹介だけでなく、私共が新しい蓄電デバイスの実用化にいかに関与するかを示唆をいただく場ともいたしたいと考えております。多数の方々のご参加をお待ちしております。

記

日時 平成29年1月13日(金) 13:30~16:40  
場所 ナレッジキャピタル コングレコンベンションセンター  
ルーム3(講演会)、ルーム2(交流会) (<http://www.congre-cc.jp/access/>)  
大阪市北区大深町3-1 グランフロント大阪北館 地下2階  
主催 国立研究開発法人産業技術総合研究所 関西センター  
後援 近畿経済産業局、大阪商工会議所、  
(一財)大阪科学技術センター  
協賛 電気化学会関西支部  
定員 130名  
参加費 無料(交流会は別途参加費3000円)

参加申込 <http://www.aist.go.jp/kansai/ja/news/e20170113.html> よりお申し込みください。

<〆切 平成29年1月6日(金)>

Web 申込みが出来ない場合は下記問い合わせ先まで次の内容をお送り下さい。

件名: 第2回電池技術研究部門フォーラム参加申込

1) 機関名、2) 所属、3) 氏名(ふりがな)、4) 交流会参加有無、5) 連絡先(E-Mail等)

問合せ先 産総研関西センター 第2回電池技術研究部門フォーラム事務局

(産業技術総合研究所関西センター 産学官連携推進室内)

riecen2016-ml@aist.go.jp TEL: 072-751-9460

最新情報は右記にてご確認ください。 <http://www.aist.go.jp/kansai/ja/news/e20170113.html>

---

国立研究開発法人産業技術総合研究所関西センター研究講演会

第2回電池技術研究部門フォーラム

「全固体型蓄電デバイス実用化への挑戦」

—高信頼性・安全性を実現するリチウムイオン蓄電池の最新開発状況—

プログラム

日時 平成29年1月13日(金) 13:30~16:40

場所 ナレッジキャピタル コングレコンベンションセンター ルーム3

- 13:30~13:40 開会挨拶  
関西センター 所長 長谷川 裕夫
- 13:40~13:45 来賓祝辞  
近畿経済産業局
- 13:45~14:45 基調講演 「次世代電池への夢—デバイスの全固体化を求めて」  
国立大学法人東京工業大学 物質理工学院 教授 菅野 了次 先生
- 14:45~15:00 休憩 (15分間)
- 15:00~15:30 研究紹介 「硫化物系固体電解質を用いた全固体リチウム二次電池の開発」  
電池技術研究部門 蓄電デバイス研究グループ 作田 敦
- 15:30~16:00 研究紹介 「酸化物固体電解質を用いた全固体リチウム二次電池の開発」  
電池技術研究部門 蓄電デバイス研究グループ 奥村 豊旗
- 16:00~16:30 研究紹介 「全固体型リチウム—空気電池の開発」  
省エネルギー研究部門 エネルギー界面技術グループ 北浦 弘和
- 16:30~16:40 閉会挨拶  
電池技術研究部門 研究部門長 谷本 一美
- 17:00~18:30 交流会 (コングレコンベンションセンター ルーム2)

参加費 無料 (交流会は別途参加費)

災害の発生に備え、誘導人員、避難経路の確保等により、十分な安全対策を講じています。

---